

学生の自己学習を支援する新しい授業の試み

大村 恵子

1. はじめに

私は東洋女子短期大学で10年以上に渡って英語の授業を担当し、英語を身につけるために学生と教員がすべきことについて模索し続けてきた。そして、その間に、従来型の一斉授業を行うだけでは学生の英語力は一向に伸びないということを実感してきた。特に、教員が指導して学生に文法の解説や日本語訳や解答を授ける授業の時代は終わろうとしているように思える。本稿では、東洋女子短期大学で2002年度から私が担当してきた「English Training」という1, 2年生の必修科目を中心に、大学における英語の授業の役割について考えてみたい。

2. 英語ブームと学習環境の充実

バブル崩壊後、長引く不況の中で世界経済のグローバル化が進み、日本企業もコスト削減を中心に海外の競争相手と激しい戦いを繰り返している。そして、日本国内の企業であっても、海外との取り引きが一般化し、海外出張以外でも英語を話す機会が増大している。一方、インターネットの普及にともない、家庭の中にも海外から大量の情報が流入し、英語で直接情報をやりとりする機会も日常化してきた。今や英語が使えるかどうか、国や企業だけでなく、個人の生活にも革新的な意味を持つようになってきた。1979年に初めて実施されたTOEIC試験も、2004年度には日本国内の受験者が143万3000人に達した。TOEIC試験のスコアを採用や昇進の条件にする企業は、今後ますます増えると予想される。

そして、こうした国際化や情報化による英語のニーズを背景に、英語力をつけたい人々を対象とした講座や教材が数多く作り出され、一大産業にまで発展している。注目すべきは、英語学習熱が高まる中で、学習環境が飛躍的な進歩を遂げたことである。以前はテレビ、ラジオの英語教育番組や映画館で上映される映画など国内で「生きた英語」に触れる機会は限られていたが、カセットテープレコーダー、ビデオテープレコーダー、CDプレイヤー、DVDプレイヤー、パーソナルコンピューター、インターネットなどの普及により、個人が自宅で

英語の学習環境を整えることが容易になった。書店に並ぶ英語教材も、学習参考書を別にしても膨大な量に及び、その内容も学習者の様々なニーズに応えるべく驚くほど多種多様になっている。

3. 求められている英語力と学校の英語教育

今日、こうした社会環境の劇的变化の中で、小学校から大学までの学校教育においても、積極的に英語を話し、聞くことが驚くほど重視されている。2002年の新学習指導要領により、多くの小学校では「総合的な学習の時間」に英語の授業が導入され始めた。中学校でも英語が必修となり、その目標として「情報や相手の意向などを理解したり自分の考えを表現したりする実践的なコミュニケーション能力を養う」ことが明示された。2003年に文部科学省から発表された『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画』においても、ツールとして英語を使いこなせる日本人の養成が、英語教育の緊急課題とされている。2006年度から大学センター試験にリスニングテストが導入されれば、英語教育の焦点はリーディング、ライティングから一層スピーキング、リスニングへと移っていくことになるだろう。

一昔前、「教養英語か実用英語か」をめぐる渡部昇一と平泉渉の間で世間を巻き込み「大」論争が行なわれたが、30年の歴史の流れの中で現実が思想を追い越し、必要とされている英語は、世界共通語の一つとして他国の人々とコミュニケーションをはかるためのものという結論が出たようである。コミュニケーションのための英語力の養成は、ビジネス社会だけでなく学校教育の中でも重要課題と位置づけられるまでになった。

4. 学校の英語教育に関する三つの問題点

しかし、残念ながら、中学から大学まで学校の授業だけで英語を身につけることができた学生を見つけることはまれである。英文科や外国語学科の場合も例外ではない。問題は、大きく分けて、学習者としての学生、教育者としての教員、及び、制度としての学校にあるが、その複雑な絡み合いが問題の所在を曖昧にし、解決をより困難にしている。

誰もが知っていることであるが、学生の多くは受験や単位取得以外に英語を学ぶ明確な動機を持っていない。それは英語が話せなくても日常生活において特に不便は感じないという日本の状況が大きく作用している。英語学習の目的についての調査でも、「日本語の字幕なしで洋画をそのまま理解したい」、「海外旅行を自由に楽しみたい」、「英語を使って海外で働きたい」などと漠然とした答えは返ってくるが、そのために必要な英語力や学習方法について具体的に考えている者は非常に少ない。学生は自分の英語学習についてあまり主体的ではなく、「英語ができる」ということが「英語がペラペラ話せる」という以上のイメージにはなら

ず、どうすれば英語を使いこなせるようになるかについて具体的、論理的に考えてみようとはしない。英語学習の目的が多様化している一方で、個人の動機付けはむしろ弱体化しているため、目標達成のための方法論も明確になっていないように思われる。

教員側の問題点は、一斉授業のあり方と密接に関わっている。教員と学生の関係は、恐らく明治初期の文明開化のころからほとんど変わっていない。当時の英語教員は、貴重な知識を持つエリートであったが、あらゆる分野の知識が社会に開かれている現在の情報化社会では、教員はもはや特別な存在ではなくなっている。しかし、未だに英語教員の多くは学生との知識の差を利用し、自分が持っているものを学生に授けていく形式で授業を運営している。教員は授業中教材を解説することに力を注ぎ、学生が実際に英語を習得できているのかどうか、英語が運用できるようになっていくのかどうかに、あまり関心を抱かない。

もちろん、教員は限られた範囲内で、日々、学生の学習動機を高めるような工夫と努力を行ってはいる。しかし、そのような試みも場当たりの、計画的に行われているとは言いがたい。教員が、教材を解説するために学生から学習時間を奪い、授業時間を独占的に消費してしまっているという現状を変革するまでには到っていない。

ネイティブ・スピーカーの教員に過度の期待をすることもできない。彼らが採用しているコミュニケーションアプローチは、授業で学んだことを学生が日常生活の中で積極的に応用していくことを前提にしているが、日本で生活している限り、英語を話す場は全くなく、その学習効果は非常に限られている。

そして、システムとしての大学の英語教育の問題点であるが、学生の英語習得について責任の所在がはっきりしない制度を作り上げてしまったことである。カリキュラムとして用意された複数の英語科目は、異なった教員により分担され、それぞれ別々に教育されるにすぎない。しかも多くの場合、教材だけでなく、テストも成績評価も全くバラバラである。英語のカリキュラム全体についても各授業についても、あらかじめ決められた目標がどの程度達成されたか、授業のどういう点が成功で、またどういう点が失敗だったかという検証は全く行われない。その結果、学生が英語を習得するために、今後、何がどれだけ必要かなどについて、データをもとにした具体的なプランもカリキュラムも研究されてきていない。

5. TOEIC 試験と自己学習する時代の到来

もちろん、実践的な英語力が強く求められる中で、学校の英語教育では十分に力がつかないことに不満を抱く学習者は、学外で塾や予備校、英会話学校などに通い、英語を学び始めている。既に大学受験の世界では学外のスクールに通うことが一般的になっているが、大学生の場合も「ダブルスクール」と言われるように、学外の教育機関に頼る者が増えてきた。

しかし、ここ数年の急激な国際化、情報化及び学習環境の充実の中で、今や英語学習者は大学やダブルスクールを飛び越えて、新たな段階、つまり自己責任による自己学習の時代に入ろうとしているように思われる。TOEIC 試験は、今までの英語試験の中で、多くの学習者が「生きた英語」の試験と感ずることができた初めての試験であったが、次に、近年急速に普及した TOEIC 試験を例に挙げて、自己学習する時代の到来の必然性について考えてみたい。

TOEIC 試験では、2 時間の試験時間内にリスニング問題100問とリーディング問題100問の合計200問を解かなければならない。2 時間連続して大量の英語をスピード処理できるようになるためには、学校や予備校で教員の指導のもと、対策本を使ってコツコツ勉強するだけでは対応できない。つまり、英語運用の習熟度が試される試験では、「慣れるまで習え」の標語の通り、日々スポーツのように大量のトレーニングを行うことが必要不可欠である。TOEIC Friends Club のデータによると、300点のスコアを100点アップするために必要なトレーニング時間は、200時間から600時間となるが、それは学校や予備校で学習する量を大きく超えている。

その上、TOEIC 試験では、受験者の英語によるコミュニケーション能力を、英検のように合否で示すのではなく、990点までのスコアを5点刻みで測定している。つまり、受験者の英語力を数値化したことが従来の英語検定試験との大きな違いである。このため、「どの教材を、どのような方法で、どのくらいやれば、どのようになるのか」という具体的な学習戦略の必要性が浮き彫りになった。実際、TOEIC 試験の受験者たちをサポートする組織である TOEIC Friends Club は、目標スコア到達までに必要なトレーニング時間を例示する一方、英語を教えるのではなく、英語の自己学習法を教えることをその主要な目的としてきた。自己学習法を教え、それを支援する以外に、TOEIC 受験者のスコアを上げる方法がないことは明らかだからである。

TOEIC 試験の普及によって明らかになってきたのは、いわゆる実用英語を習得するためには、英語の難解な知識の詰め込みではなく、ごく基本的な英語の反復練習が必要であり、今のままではアメリカ人が日常使っている簡単な英語でさえ理解できないという現実である。言い換えれば、英語を習得する上で、難解なことを教えてくれる教員の教育よりも、英語を繰り返してトレーニングする学生の自己学習が桁違いに重要であるということである。私たちは、この現実を英語教育の前提として改めて真剣に受け止めなければならないだろう。教員はこの前提を、英語を学び合う仲間として、学生と一緒にしっかりと共有すべきなのである。

6. 自己学習支援のための授業とそのガイドライン

今まで見てきたように、英語のコミュニケーション力が急速に求められる時代の中、TOEIC 試験の普及などによって、学習者が本腰を入れて自己学習すべき必然性が明確になっていった。英語を習得するために学生がすべきトレーニングの量が、教員が漠然と考えていたよりも桁違いに多く、英語の授業において、授業の主人公が教員ではなく学生であることが明らかになったと言っているだろう。

東洋女子短期大学では、2002年度から1, 2年生の必修科目として「English Training」という科目を開講し、学生の自己学習を支援している。学生の自己学習を支援することが、大学の英語教育の重要な役割の一つとなった。私は、この授業で学生の自己学習を支援するために、大きく6項目に分けて解説、実践しているが、次にそのガイドラインを示す。

1) トレーニングと自己学習の必要性を理解すること。

中学、高校までに習った英語についての知識を英語を使うための技術に変えるために、勉強ではなくトレーニングが必要であることを説明し、次に、学習者のレベルに応じて教材とトレーニング量を例示していく。

2) トレーニングの方法を理解すること。

音読、リスニング、リピート、音読筆写、スラッシュリーディング、「日本語訳から英語を言う」などの方法とその学習効果を説明する。

3) トレーニングの方法を習得すること。

各トレーニング方法を皆で繰り返し実践し、実際にその学習効果を体験して各自が活用できるようにする。

4) 自己学習を継続するコツを学ぶこと。

電車による通学時間をリスニングなどに活用し、学外でトレーニングをする習慣を身につける。そして、トレーニング時間を5分単位で記録し、目標達成までの指針として使用する。

5) 毎週トレーニングの授業に積極的に参加すること。

個人よりも集団で行う方が学習者の集中力が増すので、授業のトレーニングは、個人のトレーニングより効果が高い。

6) 定期的に TOEIC 試験を受験すること。

英語力は、長期的に見れば、必ずトレーニング量に比例して伸びていくものである。TOEIC 試験のスコアを到達目標の一つとすることで、学習の動機がしっかりしてくる。

全体を通じ、学生には「どの教材を、どのような方法で、どのくらいやれば、どのようになるのか」を、常に具体的に追求していく主体的な姿勢が求められる。教員は学生に対し、あくまでトレーナー、コーチ、あるいはアドバイザーとして留まっているよう注意すべきである。

7. 「English Training」の具体的な授業内容

次に、先のガイドラインを踏まえた上で、実際にどのように授業を運営していくか、具体的な教材や方法を含め、重要点や問題点を説明しておきたい。

1) 主要教材としての中学校の英語の教科書

トレーニングの教材として中学校の英語の教科書を選ぶことに対しては、教員と学生の両方に抵抗感を持つ者が少なくない。中学校の教科書の英語は、幼稚、簡単という先入観や誤解があるためである。しかし、トレーニングの目的は、英語を読めるようにすることよりも実際に英語を話せ、書け、聞けるようにすることにある。確かに、中学校の教科書は適切に指導すれば小学生でも読めるようになるが、その英語をよどみなく話し、書ける者は英語教員を含めきわめて少ない、否、皆無に近いということを学生も教員もしっかりと認識する必要がある。

実際に、TOEIC 試験のリスニングとリーディングの問題に使われた単語の90パーセント以上が中学校の教科書に出ている単語であり、中学校レベルの英語を技術として獲得していれば、TOEIC 試験で600点を獲得できるという調査もある。中学校の教科書は語学的に網羅的であると同時に、内容的にも教育的メッセージがあり、繰り返し音読することに耐えられるほとんど唯一のテキストであることに注意すべきである。

2) 英語学習における音読の6つの効果

国語教育、英語教育、演劇教育から検討すると、英語学習における音読の効果は、大きく次のように分類できる。

- ① 声に出して読むので、読む練習になる。
- ② 声に出すので、話す練習になる。
- ③ 書くときには、話すように書くので、書く練習になる。
- ④ 声に出すので、自分の声を聞くことになり、聞く練習になる。
- ⑤ 音読によって、英語と意味とを訳さずに直接結びつけるので、直読直解する力を養うことができる。

- ⑥ 声を出すことによって、自分自身をしっかり英語の正面に置きすえるので、英語に立ち向かっていく身心の構えを養うことができる。

3) 6つの音読の効果を高める一連のトレーニング

実際に、6つの音読の効果を体験するために、ただ繰り返し音読するだけでなく、次のような発展的トレーニングをセットで行う必要がある。

- ① 英語を見て、内容を考えながら繰り返し音読する（読む練習）。
- ② 繰り返し音読した後、教科書を閉じ、その英語を復誦する（話す練習）。
- ③ さらにその英語を、復誦しながら筆写する（書く練習）。
- ④ CDを聞くとき、自分で音読しているかのように踏み込んで聞く（シャドウイングによる聞く練習）。読んでわかる英語、正確に音読できる英語ならば、必ず聞き取ることができる。

4) ルーティーンワークとしての一連のトレーニング

教科書の進め方として、およそ次のようにトレーニングを行うと学生の学習効果が高いようである。

- ① アイシャドウイング：CDで音声を聞きながら英語を目で追いかけ、英語の音声と文字を一致させる。
- ② 文法と内容の理解：教科書の英語について文法と内容の理解を確認する。
- ③ 音読：できるだけ大きな声で、繰り返し教科書を音読する。
- ④ リピート：聞いた英語の音声を、教科書を見ないで、できるだけ忠実にリピートする。
- ⑤ 音読筆写：教科書を音読し、復誦しながら、英語をノートに書き写す。
- ⑥ 日本語訳から英語へ：日本語訳を見ながら、できるだけ速くもとの英語を言う（書く）。
- ⑦ 中学英語で話す技術：言いたいことを、自分が知っている英語の範囲内で表現できるようにその内容を簡略化した上で英訳する。自分のことを表現できる自前の英語を増やしていく。

5) トレーニング量の記録

自己学習の量や成果を報告し合うことによって、学習者の間に連帯や協力が生まれてくる。

- ① 各自のトレーニング記録の報告と掲示
- ② 学生のトレーニング成果に応じた表彰
- ③ TOEIC 試験の結果報告

6) 学習上の問題点の話し合い

毎週授業に参加し、毎日通学の電車の中でリスニングをするだけで、かなりのトレーニング量になる。しかし、学生の英語学習上の悩みや問題は多様であり、どうしたら自己学習が継続していけるかを率直に話し合う必要がある。

トレーニングを中心とした授業の特徴は、授業終了時に英語がどのくらい身についたかを各自が実感できることである。自分の頭で英文の意味を考えながら、目で英語を読み、口で英語を発音し、耳で自分の声を聞くことをひたすら繰り返していくと、英語が身体に刷り込まれて、テキストを見なくても英語がスラスラと口をついて出てくるようになる。そして、natural speed の音声もゆっくりと聞こえるようになる。このような自分の中でおきる変化に気づくことができれば、それをバネにして、さらなるトレーニングに励んでいくことができる。そうなれば、トレーニングの授業は成功したと言える。

しかし、トレーニングの目標が曖昧なままでは、英語力の着実な育成は期待できない。学生には、必ず達成すべき目標として次の二つを掲げ、定期的にその達成度をテストしている。一つは、教科書のCDを聞いてその英語をリピートできるようになることであり、もう一つは、日本語訳を見てもとの英語が迅速に言えるようになることである。中学校の教科書を一通りやり終える頃には、日常会話なら何とかこなせるまでの英語力が身につけているはずである。

8. 「English Training」のさらなる展開

英語を習得するために、大量のトレーニングを自主的にしなければならないことは理解できても、授業外でトレーニングを継続していくことは大変難しい。実際に、ここ数年の学生の学習記録の報告をみても、200時間を超えてトレーニングを継続できた者は2割を超えない。それどころか、トレーニングそのものに倦怠感を覚え、脱落する者が少なからずいることも明らかになってきた。

既に述べてきたように、授業では、自己学習法の理解と習得を柱に、学習者が継続してトレーニングを行えるように、様々な自己学習支援の方法を工夫してきた。しかし、大半の学生の場合、授業態度からも推測できるように、学習する集中力や根気に根本的な問題があることも事実である。今や、英語学習の支援だけでなく、学習者の支援、つまり学習者の集中力や根気などの学習態度を養うことが大きな課題であることが見えてきた。

そこで、私たちが着目したのはトレーニングの根幹にある学習者の身体である。トレーニングは、言うまでもなく、繰り返し身体を使う学習法であり、身体をその根幹としている。

トレーニングそのものを活力あるものにするために、身体による学びを原点から見直す必要があった。

私たちは、通常、心に注目し、かつ、とらわれ、身体を抑圧し忘却していることが多い。しかし、心（脳）は、本来、身体を媒介とせずに、外界の情報を入力することもできなければ、出力することもできない。その厳然たる事実を、日本の思想的伝統は、「身心一体」として捉えてきた。授業では、自己の根拠としての身心一体、及び、学習法としての身心一体をとりあげ、禅、ヨーガ、体操、ストレッチ、呼吸法、演劇、歌、落語などから、身体技法をアレンジして英語教育の現場で活用することにした。中でも、齋藤孝の身体論や近江誠の演劇論は教育現場への配慮があり、大いに参考になった。次に、実際に、授業で取り入れている身体技法について紹介する。

- ① 柔軟体操と姿勢（上虚下実）
- ② 呼吸の調整（丹田呼吸）と発声練習
- ③ 歩きながら、次に、バスケットボールをパスしながら、そして、スクワットしながらの音読とリピート（姿勢と呼吸の展開）
- ④ 演劇の手法を使った表現ゲーム（身体表現）
- ⑤ 英語紙芝居や英語落語の発表（身体表現）

ここで詳しく述べることはできないが、授業では体をほぐし、姿勢を整え、呼吸を整え、身体から英語のトレーニングに自然に入っていけるように指導している。身体論の技法を取り入れることによって、自己学習の継続の問題が解決されたとは言えないが、少なくとも授業の場での学習は、今までとは比べ物にならないくらい活性化した。だるそうにしていたり怠けようとしていたりする者は皆無である。学生の自己責任による自己学習を支援するために始めた授業の中で、学生がスポーツのように身体を使った一斉授業を楽しんでいるのは、驚くべき発見であった。

9. おわりに

こと一般教養の英語に関しては、教員主導で学生に英語を教える従来の授業は、その役割を終えたのではないかと思っている。書店の本棚は、英語を親切、丁寧な解説してくれる参考書や問題集で溢れ返っている。問題の焦点は、その英語をどうしたら運用できるようになるのかという点に移ってきているのではないだろうか。

そして、近年、TOEIC 試験が教えてくれたことは、アメリカ人が日常ごく普通に使う英語

であっても、それを運用できるようになるまでには、大量のトレーニングが必要であるということである。もはや、塾や予備校や英会話スクールに頼る時代も終わり、自己責任による自己学習の時代が始まっているように思う。

もちろん、学生の自己学習を支援する「English Training」の授業に関して、「中学校の英語の教科書は易しすぎる」、「音読などのトレーニングを学生は好まない」、「トレーニングなどは大学ですべきことではない」などという否定的な意見もある。しかし、その意見の大部分は、既に述べてきたように先入観や誤解にもとづく速断にすぎず、実際に授業に参加していただければその問題も解けると思う。

国際化、情報化の中であって、日本を取り巻く状況も目まぐるしく変わっていく。誰もが生き残りをかけて現代にシンクロしていこうと、情報戦に浮き足立っているように見える。しかし、近年、小学校教育や老人介護においてもトレーニングという学習法が見直されているように、大学教育においてもトレーニングが持つ身体知の意味がもっと見直されてもいいように思う。日本の伝統的学習法は身心一体であったはずだ。「English Training」の授業も、学習者が体操着を着て、連帯感や一体感を覚えながら、スポーツのようにごく普通に体育館で行えるものになるよう今後も努力していきたい。

注

本稿は短期大学英語教育研究会主催第4回短期大学英語教育研究会（2004年12月11日）において口頭発表した原稿に加筆、修正したものである。

参考文献

- Omura, Masahiko, & Keiko Omura. "The Importance of Self-study in English Language Learning." *Studies in Liberal Arts and Sciences*, No. 36 (2003), pp.83-97.
- 近江誠『頭と心と体を使う英語の学び方』研究社, 1988年
- 近江誠『英語コミュニケーションの理論と実際』研究社, 1996年
- 大島希巴江『世界を笑わそ!』研究社, 2001年
- 太田信雄『いつでもどこでも英語・一日中おしゃべりカード』第三書房, 2005年
- 鹿野晴夫『TOEIC テスト300点から800点になる学習法』中経出版, 2003年
- 絹川友梨『気持ちが伝わる声の出し方』角川書店, 2003年
- 國弘正雄『英語の話し方』サイマル出版会, 1984年
- 國弘正雄『國弘流 英語の話し方』たちばな出版, 1999年
- 齋藤孝『自然体のつくり方: レスポンスする身体へ』太郎次郎社, 2001年
- 齋藤孝『子どもの集中力を育てる』文藝春秋, 2004年
- 四軒家忍『「超」英会話』明日香出版社, 2000年
- 鈴木孝夫『武器としてのことば』新潮社, 1985年
- 鈴木孝夫『日本人はなぜ英語ができないか』岩波書店, 1999年
- 竹内敏晴『「からだ」と「ことば」のレッスン』講談社, 1990年
- 千田潤一, 鹿野晴夫『TOEIC テスト正しい学習法』SS コミュニケーションズ, 2001年

中野民夫『ワークショップ』岩波書店，2001年
養老孟司『脳と自然と日本』白日社，2001年